

編集後記

東京の小金井市から愛媛県大洲市の山奥に移ってきて、4年と3ヶ月が過ぎた。いわゆる「半農半X」暮らしであり、私の場合のXは、パソコンを使った編集というデスクワークである。

「農」のほうは、家族3人でちょうど足りるくらいの4アールほどの田に、稲を植え付けている。今年は天候が悪かったのと、去年同様にウンカもかなり発生しているので、どれくらい収穫できるかわからないが、少しは食べられると思う。ほかに栗林が20アールほど。栗は9月後半から10月中旬にかけてが最盛期だ。半分は販売し、半分は自家消費と友人たちに送っている。また家の周りには、土地のことで「あさじり」と呼ばれる自家消費用の畑があり、夏野菜と冬野菜を交互に作っている。といっても、母が先導してくれるので、私はそれを見ながら教えてもらうだけだ。

夏の間は、なんといっても草刈りが重労働である。もちろん手刈りなどできないから、機械（刈り払い機）を使う。平らな畑地ならどうってことはないのだが、畑と畑が垂直方向に連なる法面（斜面）の草は手ごわい。刈ろうにも傾斜がきついで足場が悪く、そのため年に一度くらいしか刈らなくなると、カヤヤクズが親指ほどの太さに成長してくる。ベストなのは、5月、7月、9月と、年に3回刈ること。でも、きれいに刈ったあと、ひと月たったらもう膝丈くらいに伸びているので、同居人とふたりでいつもどこかの草を刈っているというのが現実である。もちろん毎日ではなく、週に2〜3日、それも1日2時間ほどではあるけれど。また、夏場の草刈りには昼寝とビールが欠かせない。

「X」であるデスクワークのほうは、午前10時から午後4時くらいまで。デスクワークといっても、いわゆる「お金になる仕事」はぼちぼちで、半分はボランティアとかプライベートな作業である。家賃もかからないので、これくらいで十分だ。山暮らしの魅力はこのように、マイペースでゆっくりとした日々を送れることだが、一方で人との接触が少ないために淋しさを感じる時もある。インターネットやテレビはあるし、メールやfacebookなどで友人・知人たちとやりとりもしているが、やはり生身の人と出会うことが、私には一番の刺激になる。そのため勉強会やシンポジウム、さらに近縁の地域おこしイベントに積極的に出かけ、友人・知人には山の中のわが家に遊びにきてもらうようにしている。

この点で驚くのは、80歳になるわが実母の生活だ。彼女は1年のほとんどを山の中で過ごしている。近所の知り合いも年々減っていくので、話し相手がいなくて淋しくなったとつぶやいているが、季節をとおしてやるべきことが体に染みついているせいか、今のところは頭もほけることなく、毎日、野良仕事に精を出している。その原動力のひとつは彼女の好奇心であるが、もっと大きいのは植物の成長力だと思われる。日々成長し、手間をかけただけ見返りのある野菜や稲。これらの成長が励みになっていることは間違いない。また、母は周囲の観察を欠かさず、めずらしい鳥や野草を見かけたら教えてくれる。山暮らしは周囲の環境に敏感にならないと、成り立たないのだ。

「半農半山暮らし」のわが母に、社会性があるかと聞かれたら、答えに窮するのも事実である。30年の時間差をもって生きる娘として、母からも世の中からも多くのことを学ばねばならない。その点で、この『民族植物学ノオト』の編集・制作作業は、私にとって大きな学びの場となっている。今号も知的興奮を覚える文章に出会い、大げさにいえば、なんのために生きるのかを改めて考える機会を得ることができた。木俣先生に感謝するとともに、本冊子が心ある多くの人に読まれることを願っている。

宮本幹江
(2014年9月)

